

F/T13

FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ● 2020

『四谷雑談集』+『四家の怪談』 /

中野成樹、長島確

Yotsuya Zotanshu + Yotsuya Kaidan /
Shigeki Nakano, Kaku Nagashima

『四谷雑談集』 Yotsuya Zotanshu

11.9 (Sat), 14 (Thu), 17 (Sun), 19 (Tue), 23 (Sat)

四谷エリア Yotsuya area

『四家の怪談』 Yotsuya Kaidan

11.10 (Sun), 15 (Fri), 16 (Sat), 20 (Wed), 24 (Sun)

北千住・五反野エリア Kita-senju, Gotanno areas





対談：中野成樹×長島 確

『四谷』から『四家』へ。「物語」を解き放つ

同じ劇団に所属しながら、独創的な個別の創作も展開する創作・演出家中野成樹とドラマトウルクの長島確。稀有な創作スタイルを確立しつつある二人が、王道の古典『四谷怪談』を二つのツアー形式の作品へと変換する。しかも、異ジャンルのアーティストが複数参加する「バンド」が創作母体。二つの旅には、どんな「物語」が宿るのか。

——まず『四谷怪談』を題材にした作品をツアー形式で行うという発想は、どこから来たものでしょうか。

中野 実は『四谷怪談』という題材も、市街に出てツアー形式でということもF/Tからの提案でした。同じ主催プログラムで木ノ下歌舞伎が『東海道四谷怪談』を上演するので……。

長島 当て馬的に(笑)。

中野 そう、当て馬ですよ中野・長島は(笑)。普段、劇場で既存の海外戯曲などからコツコツ創るタイプの僕にとっては、得意技を奪われたような企画ですし。でも、そんな環境で自分に何ができるかに興味が湧いたのも事実。しかもF/Tという大舞台でチャレンジできるわけですから、ありがたい提案でした。

長島 実は僕には、『四谷怪談』に個人的な因縁がありまして。2005年にドイツの演出家ヨッシ・ヴィーラーさんが東京で『四谷怪談』を上演した、そのチームの一員だったんです。でも途中で離れることになり、題材が面白かっただけに消化不良

の想いが残った。その時のリサーチで鶴屋南北の『東海道四谷怪談』と『忠臣蔵』が表裏の関係にあることを知り、さらに01年9月にアメリカで起きた同時多発テロを重ね、「仇討ちとテロの位置関係」なども考えるなかで、中野さんと一緒に川崎市アートセンターで『忠臣蔵プロジェクト』(09年は『忠臣蔵』を検証するトーク+実演の『忠臣蔵(と)のこと』、翌年は4日にわたり『忠臣蔵フェア』と題した講演、浪曲、無声映画+活弁、演劇などからなるフェスティバル)を行なうことになった。だから僕には思い入れのある、是非ともやりたい企画でした。

——ツアー形式、劇場外での公演に関しては、お二人それぞれ経験をお持ちかと。

中野 僕は08、09年に野毛山動物園内でE.オールビーの『動物園物語』を上演した『Zoo Zoo Scene～ずうずうしい～』など、何度か経験はあります。長島さんは規模も大きく、方法論からして演劇にこだわらない『アトレウス家』プロジェクトをやっている。でも経験があるからこそ、野外で作品

を上演する難しさは身に染みていて。「台詞を聴かせる」「役者の表現を味わう」なら、ノイズの少ない劇場など屋内で上演するに越したことはない。野外ならまるで違うことをやるべきで、だから今回は、「街の中を歩いた先に、どこかに入って芝居を見せる」みたいなことはやめようと、最初の段階で決めていました。

——長島さんの関わり方も、いつもとは異なるのですか。

長島 僕の場合、肩書きは同じドラマトゥルクでも関わり方は企画ごとに違うので、特別に何かを変えろということはありません。ただ野外では様々なノイズにどう対処するか、できること・できないことの判断など含め、やるのが膨大に増えるので、僕の働く余地が多少増えるかと思っています。いわば野外要員ですね(笑)。

中野 僕は屋内外、いつでも頼りにしてます。今回の作品づくりの母体となる「つくりかたファンク・バンド」も、「創作上の決定権をバラす」のが意図として大きくある集団。普段は演出家の僕が、何はともあれ最終決定権を全部握り「最後は決めます、責任も取ります」という形式でつくっていますが、今回は長島さんが最終決定を下しているものも結構ある。この先の創作でも、バンドのメンバーが決定を下す機会も増えるはず。「任せますから、どんどん決めちゃってください!」ということで、作品の広がりもこれまでにないと思っています。

長島 演劇は本来非常に多様なものですが、劇場で戯曲をベースにつくる演劇は、その多様性を獲得しないまま終わってしまう場合が多い。野外で行うだけでも既に予想しがたいノイズが作品に関与しますし、公演のための本を2冊づくり、そこで既に写真の川瀬一絵さん、イラストのかつしかけいたさん、文章担当の小澤英実さん、デザインの青木正さんが参加し、本編ではさらに建築の佐藤慎也さんや映像の須藤崇規さんや音楽の大谷能生さんが入っている。一人のディレクションで固めず、他の人に任せただけが作品要素は増えますから、今

回は複数のつくり手から要素を積極的に取り入れようと思っているんです。

「物語」を開く

キーワードは「お世話」と「応援」

——この公演では『四谷怪談』の原典である『四谷雑談集』の再編版と、中野さんが書いた新作『四家の怪談』を、手引き書として配布する形式になっています。著名な『四谷怪談』の「物語」を真ん中に、新旧2方向へ別の「物語」を展開したとも見えますが、フェスティバル・テーマでもある「物語」の定義や扱いについては、どうお考えですか。

長島 調べていて気づいたのですが、噂など断片的なエピソード、つまり「小さな物語」が街の中から湧き、語り継がれ、普遍的な『四谷怪談』という「大きな物語」へたどりつくという成り立ちがあるんですよ。これは『忠臣蔵』と『東海道四谷怪談』にも通ずる構造で、大義名分を背負った「大きな物語」としての『忠臣蔵』があり、そこでは拾いきれない小さな、家族や人間の物語を南北が揃って書いたのが『東海道〜』だと。今回も同じ図式が当てはまる気がしています。木ノ下歌舞伎が6時間かけて上演する『東海道〜』は「大きな物語」であり大きな企画。ならば僕らがやるべきことは、そこから零れる「小さな物語」をいかに拾うか、じゃないでしょうか。

中野 「物語を旅する」というテーマじたい、ひどく曖昧ですよ。その言葉にはどこからでもたどりつける。「何をやっても物語に回収されてしまう」と言ったほうが良いかな。僕も新作とはいえ、「岩」という名の登場人物を出した時点で『四谷怪談』に回収されているわけで、まして観客はさまざまな「物語」に紐づけて作品を観るから、つくり手は自分たちが用意した「物語」だけでなく、観客それぞれの中に生じる「物語」にも追われるような状況になる。

——「物語」と作品との間の距離をいかに取り、客



中野成樹 (なかの・しげき)

演出家、中野成樹＋フランケンズ主宰。1973年生まれ。有明教育芸術短期大学講師。主に海外古典戯曲をとりあげ、誤意識(誤訳＋意識)なる独自の手法で、イメージの凝り固まりつつある過去の名作を今に仕立て直す。本作には多様なメンバーとともに、つくりかたファンク・バンドとして臨む。

体化するかに取り組んでいるのですか。

中野 いや、いくら距離を取って逃げようとしても、僕らつくり手が「物語」をコントロールするのは不可能でしょう。特に街に出ると、いくらこちらが用意した「物語」を声高に宣言しても、立ち会う人が別のノイズを選んだら手も足も出ない。でも人間は「物語」のない生き方はできない。「物語」を捨てる決意って、人生を捨てる決意だろうし……どうしようかな……って僕なんか、死を間近にした人みたいなこと話してませんか(笑)?

——演劇や創作を否定するような発想ですから、無理もないかと……。

中野 でも同時に、すごくシンプルなことにも思えるんです。「物語」の源にあること、誰かを呪うとか祝う感情、つまり人の気持ちって、要はそこに一本の木が生えているようなもので。空気と水を吸ってたら、枝が伸び葉が茂った。僕らは「あ、木だ」って思えばいい。でもいつの間にか誰かがそこに勝手に「物語」をつくる。木をただの木にしてくれなくなる。木はただの木じゃん! って。ああ、取り留めがなくなっていく!

長島 でも木のたとえはシックリくるな。僕は今回、『四谷怪談』の世話をしている気がするから。

雑談集にも新作にも同じように人間たちのエピソードがあり、場所や土地があり、そこに「つくりかた〜」のメンバーがゴソッと集まっている。それ以前にも多くの作家やつくり手が『四谷怪談』に関わっていて、僕らは今、その作品の歴史の一部を世話しているんじゃないかと。

中野 『四谷怪談』はつまり、お岩さまが出てくる「物語」の総称でしょう。そう考えると僕は、「岩」という人の世話をしているとも言える。『四谷雑談集』でお岩さまは失踪するけれど、姿の見えなくなった人のお世話もするし、『四家の怪談』はそんなお岩さまが女子大生として戻ってきてくれてもいいなと思って書いたんです。「今度はハッピーになれる道を用意しました。カモン!」と空に向かって叫ぶ、みたいな(笑)。

そのうえ作品のコースが北千住・五反野エリア。僕は隣の葛飾生まれですが、芸術や生半可な「物語」に依拠せず、気張らずに生きる人が多いのがあの地域の特徴。木を木のまま普通にしてくれる人々の中にお岩さまの「物語」を解放することで、希望が見出せる気もしているんです。

長島 僕、「物語」にひどい嫌悪感を感じた時期があったんですが、中野さんの話を聞いていてその理



長島 確 (ながしま・かく)

ドラマツルク、翻訳家。1969年生まれ。日本におけるドラマツルクの草分けとして、コンセプトの立案から上演テキストの編集・翻訳・構成まで、身体や声とともにあることばを幅広く扱う。近年は『墨田区／豊島区／三宅島在住アトレウス家』『長島確のつくりかた研究所』(東京アートポイント計画)など劇場外でのアートプロジェクトも主導。

由が分かった。僕は「物語」が嫌なのではなく、「物語」が一つしかないことや、それに対してYESかNOかを迫られることが窮屈で嫌だったんです。その意味で言うと、『四谷怪談』をめぐる本と作品が二通りずつあるところに、『東海道四谷怪談』もラインナップされている。F/Tだけで『四谷怪談』が新旧三演目あるのはまず良い環境だし、そのことをつくり手も観客も面白がれたら、「物語」も少しは自由になれるんじゃないでしょうか。

——最後にひとつ。大谷能生さんの音楽は作品にどう絡むのでしょうか。

中野 テーマソングをお願いしました。「EXILEとAKB48を足して2で割った」感じになるはずでしたが、結果、森高千里風でした(笑)。

——ある種の応援ソングのような？

中野 応援か……やったことないな(笑)。でも、まあ大谷節でガッツリいきます。

——楽曲に作品の印象を左右しかねない、強烈なパンチがありそうです。

長島 舞台となる「街」自体が非常に強く魅力的ですから、相応に強いものでないと持ち込む意味も

ありません。演劇の発想で街を利用しようなんて考えたら、あっという間に飲み込まれます。

中野 街に喧嘩を売るくらいでないかね。そこで生きているのも命懸けて仕事をしている人たちばかり。中には毎日「死にたい」と思いながら働く人もいると思う。そんな人に、1、2ヵ月稽古や準備をした程度の演劇を提示しても何もならない。せめて「頑張ってください」と思いを込めて歌を流すだけですよ。

長島 だから応援ソングなんですね。

中野 そうか……やっぱりこの作品は「応援」なのか……。『四家の怪談』の終わり、原作では残る「呪い」を僕は「祝い」に反転したんですが、なぜかそのラストにかつて味わったことのない胸を張れる感じがあって。おそらく「応援」という大義名分があったからですね。光明が見えました。お岩さまと街の人を精一杯応援する気持ちで、作品をつくっていきます!!

(2013年10月22日 カモ・カフェにて／取材・文：尾上そら／写真：川瀬一絵)

『Zoo Zoo Scene～ずうずうしい～』(2008、09年)

動物園を散策し、閉園後の広場で『動物園物語』を観劇するツアー作品。原作戯曲の長大な独白を冒頭に配するなど再構成を施し、原作では反社会的存在でしかなかったジェリーと、観客に「動物園に行った」という経験を共有させることで、作品に新たな視点を加えた。



『Zoo Zoo Scene～ずうずうしい～ 再び』@横浜市立野毛山動物園 ©bobu

『アトレウス家』プロジェクト(2010～12年)

墨田区、豊島区、三宅島の廃屋や文化施設などに、古代ギリシャ劇に登場するアトレウス家の人々が移り住む、という設定で演劇やラジオなどさまざまなメディアを駆使して行なった体験型作品。つくり手と観客の想像力が呼応する「場」の創造が高く評価された。



『三宅島在住アトレウス家(三宅島篇)』 ©Ryohei Tomita

中野成樹による つくりかたファンク・バンド メンバー紹介

さまざまなジャンルの専門家が集い、創作された本作。
その顔ぶれと役割とは――。

小澤英実(文筆)

見た目や持ち物なんかと文章のギャップがすごいです。グレーのスウェット上下を着て、ガンガンにメタルやってる感じ。しかもバキバキの様式美。「ま、スウェットでいいじゃん」ではなく、グレーのスウェット上下と美メロが離れがたく結びついている不思議。担当はドラムとみた。リズムに魅せられます。ちなみに実際にスウェットは着てません。

大谷能生(音楽)

声をかけたら「ファンクバンドなら参加できます」と。「ファンクバンドなら何もしない人間がいても平気なんで」と。まちを歩くと色々な音が聞こえてきて、その中にそっと大谷さんの音とか音楽が混じり込んでいたら面白いだろうな、なんて思っただけ。だから、働いてもらいます。ちなみに南北の『東海道四谷怪談』の大ファンでもあるそうです。

川瀬一絵(写真)

よく長島さんと「いっぺん川瀬さんの写真をみちゃうと、まちの風景を全部「川瀬アイ」で切り取りたくなっちゃうよね」なんてことを話して。演劇側からのせまく勝手な感想だけでも、川瀬さんの写真って舞台美術のお手本のようない感じがしています。縦・横・奥行き、そして気配。そう、気配がハンパないんだ。本人も気配な人だ。あ、けはいね。

青木 正(デザイン)

ヘタすりや今回一番働いているのは青木さんじゃなからうか。「本を2冊つくりたいです」といういきなりなお願いからはじまって。しかもデザインって、割と気軽にみな意見しちゃうし。センスと人柄で乗り切っていただいております。すいません。そして、まだ伝えてないのだけでも(現在10月22日)、あと二つ大ネタをお願いしなくちゃで……。

かつしかけいた(ひとコマ漫画)

はじめは「イラスト」と思って参加をお願いしたら、「一応、僕、ひとコマ漫画なんですよね……」ということで、たしかにそうだ、かつしかさんのそれは「漫画」だった。台詞がとても好き。でも台詞がなくても好き。怨念の象徴のような岩を祝にしてみたいという思いは、そのやさしい「漫画」をみてのひらめきだったのかも知れません。

佐藤慎也(建築)

何かに困るとどこからかふと現れる人。クタクタになっていると椅子差し出してきて、煮詰まりきれずグダグダしていると紙とペンを用意してくれる。今回は「地図」を書いてもらったりしてるけど、この企画、実はすべてはこの人が描いている図なのでは？ と時おり恐怖を感じています。

須藤崇規(映像、Web)

戯曲という形で上演が記録できないツアー。を、どうにか記録してくれないだろうか、とお願ひしてる。「そうですね、どうにかして残したいですよ」と答えた彼は、これからのやるであろうその作業を「供養」とよんだ。なんて信心深い人なんだ！ とても格好いい。こういう人がいてくれると、みなとても安心できる。

作・ガイド：つくりかたファンク・バンド

中野成樹 (演劇)
長島 権 (演劇)
青木 正 (デザイン)
小澤英実 (文筆)
大谷能生 (音楽)
かつしかけいた (ひとコマ漫画)
川瀬一絵 (写真)
佐藤慎也 (建築)
須藤崇規 (映像、Web)

ガイド：フランケンス (福田 毅、竹田英司、洪 雄大、野島貴理、斎藤淳子、
小泉真希、北川 麗)
制作：加藤弓奈 (NPO法人アートプラットフォーム)

集合場所：スクワール麹町、主婦会館プラザエフ (共に四谷エリア)
東京芸術センター (北千住・五反野エリア)

協力：中村商店

F/Tスタッフ

制作統括：武田知也
制作：高橋マミ、河合千佳
制作補佐・フロント運営：横井貴子
プログラム・ディレクター：相馬千秋
ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：乾 亜沙美、榎村 真、
川又美樹、輿水すみれ、菅井新菜、塚田佳都、野口 彩、的場久美、三浦彩歌、
山崎 優、山本美幸、吉田由貴

製作・主催：フェスティバル/トーキョー

*本公演は、オリジナル書籍を手に、街を歩きながら体験するツアー形式の
作品です。

How-to-Make Funk Band:

Shigeki Nakano (theatre)
Kaku Nagashima (theatre)
Tadashi Aoki (graphic design)
Eimi Ozawa (writer)
Yoshio Otani (music)
Keita Katsushika (manga artist)
Kazue Kawase (photographer)
Shinya Satoh (architect)
Takaki Sudo (video, website design)

Guide: Franks (Takeshi Fukuda, Eiji Takeda, Takehiro Go,
Mari Nojima, Junko Saito, Maki Koizumi, Rei Kitagawa)
Production Co-ordination: Yumina Kato

Starting Points: Square Kojimachi, Shufukaikan Plaza Ef,
Art Center of Tokyo

In co-operation with Nakamura Shoten

F/T Staff

Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinator: Mami Takahashi, Chika Kawai
Production Support, Front of House: Takako Yokoi
Program Director: Chiaki Soma
Youth Arts Management Program (YAMP): Asami Inui,
Makoto Uemura, Mizuki Kawamata, Sumire Koshimizu,
Niina Sugai, Keito Tsukada, Aya Noguchi, Kumi Matoba, Ayaka Miura,
Yu Yamazaki, Miyuki Yamamoto, Yuki Yoshida

Produced and presented by Festival/Tokyo

For this performance audiences will tour various sites with a special
text (Japanese only).

今後の活動予定

中野成樹

中野成樹+フランケンス公演 『かもめのあらすじ』、別役実作品 2014年7月 シアター711

長島 権

『淡路島在住アトレウス家』2013年12月22、23日 淡路島美術大学 (あわび) 展覧会「穏やかな家」にて上演
「長島権のつくりかた研究所」つくりかたファンク・バンドの一部メンバーも参加して活動中

フェスティバル/トキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI /UNESCO) 日本センター会長
越川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (50音順)

フェスティバル/トキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化工部長
委員	八巻規子	豊島区文化工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登 (骨董通り法律事務所)	

フェスティバル/トキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 相山由香、高橋マミ、戸田史子
公募プログラムコーディネーター	小山ひとみ
メディア戦略・広報	松本花音
メディア戦略・広報アシスタント	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラム	藤井さゆり
オープン・プログラムアシスタント	田野入涼子、後藤天
票券	長原理江
票券アシスタント	菅原淳、伊楢敏
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	草原円花、一色善好
経理	堀久美子、青木亮子

技術監督

技術監督	荒川英司
技術監督アシスタント	河野千鶴
照明コーディネーター	佐々木真善子 (株式会社ファクター)
音響コーディネーター	相川晶 (有限会社サウンドワイズ)
アートディレクション+デザイン	アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
ウェブサイト	濱田真一+北島謙子+重松佑 (株式会社ソフトラボ)
パブリシティ	平昌子、望月章宏
海外広報・翻訳	アンドリュース・ウィリアム
物販	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子

主催：フェスティバル/トキョー実行委員会

東京都・豊島区 / アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団) / 公益財団法人としま未来文化財団 / NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー
助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、
チャコット株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋インバウンド推進協力会、池袋ホテル会
メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潮、CINRA.NET、美術手帖
ホテルパートナー：サンシャインシティアパルトメントホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、
サクラホテル池袋
地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり
宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)
会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)
認定：公益社団法人企業メナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信インシアプ

[会期] 平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院明、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾亜沙美、今井美希、榎村 真、田久 光、緒方彩乃、紙 弘、川又美穂、栗田知宏、奥水すみれ、
崔 潤、作田飛鳥、藤原成行、澤田 唯、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、宮川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花彩、嵯 朝美、堀久美、三浦彩歌、水野恵美、守山真利恵、山崎 優、山本美幸、吉田崇大、吉田由貴

発行：フェスティバル/トキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巢鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hitoshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuhara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Director, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisaoki Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Oriie Kyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fuji
Open Program Assistants: Suzuko Tanoiri, Takashi Goto
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyonyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishshiki
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kouno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Akawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy (Naoki Sato + Kohei Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shihichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (Ioftwork Inc.)
Public Relations: Masako Taira, Akhiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.
Supported by Asahi Group Arts Foundation
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO
Special co-operation from SEIBU (IKEBUKUROHONTEN), TOBU DEPARTMENT STORE (IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd.)
In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association
Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINCO, CINRA.NET, Bijuus Techo
Hotel Partners: Sunshin City Prince Hotel, Hotel Metropolitan, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr
PR Support: Poster Har's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)
Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013